

「救命救急 24 時？」

我ながら、ふざけた説教題にしたものだと、ちょっとだけ反省しています。ちょっとだけなんで、ほとんど反省はしていないってことですが……。かなり曲がった表現ではあれ、この説教題で伝えたかったのは、「私たちの助けは、いつ何時でも、ちゃんとやってくるよ」ってことです。先ほど歌いました讃美歌 21 の 155 番「山べにむかいて」の歌詞の通りですね。「助けはいずかたより、きたるか。あめつちのみかみより、たすけぞわれにきたる」、「みたみをば守るもの、まどろみねむりまさじ」、「いずるおり、いるおりも、たえせずなれを守らん」。今時、日常生活では聞かない文語体の歌詞ですが、ようするに、「私たちの助けは、天地を創られた神様から来るもので、私たちを守る神様は眠たそうにしたり、寝入ったりせずに、どんな時でも絶え間なく、私たちを守ってくださる」ということですね。それは、まるで 24 時間体制で私たちの命を救おうとする、救命救急の元祖のようなイメージです。

と言っても、あえて言葉にするなら、実際に救命救急を担ってくださる方々の、神頼みではない、現実的な努力と使命感に敬意を払います。その汗の滲む献身的姿勢を、手前勝手に宗教色に染めることはしません。「彼らは、信仰には気付かず、でも神様の御業を担っている」という見方は、さすがに勝手が過ぎるでしょう。むしろ、そういう現実的に私たちの命と健康を守ってくれる方々への感謝を通して、私たちは私たちの神様の輪郭を少しでも知ることが出来ればいいのかな、と思います。それは、キリスト教信仰の有無に関わらず、お母さん、お父さんから注がれる温かな愛情を通して、神様の愛を説明・理解しようとする筋道と一緒にですね。この世界には、目には見えない神様に代わって、ちゃんと目を凝らすと見えてくる、神様の愛と御業を体現するたくさんの尊く感謝

すべき存在があります。その身近なところ、具体的なところから、私たちの信仰や神学というものも再解釈できるといいのかも知れませんね。色々あって気分が乗らず、とてもじゃないが聖書を読んだり、祈ったりできない時にも、顔を上げて周りに目を向けると、そこにも神様の愛を知ることにつながる、働きと心づかいがあるということです。

今日の聖書箇所である、盲人バルティマイの癒しの物語も、奇跡的な伝承としてではなく、私たち一人一人がその人生において経験した、病気と快復、傷と治癒に結び付けて読んでみたいと思います。ここに描かれ、表現されているのは、夢のような奇跡ではなく、一人の視覚障害者が治療されて目が見えるようになった、という、その喜びの出来事なのだ、と。そして、その喜びの出来事の切っ掛けとなるものが、私たち一人一人に与えられている「信仰」なのだ、と。決して、それは「信じる者は救われる」という単純な理屈ではなく、諦めない、期待を忘れない、自分を越えたところで織り成される美しい業に委ねてみる、という、そういう気持ちも大事だよってことです。「自分だけで何とかしなければ」という思考の束縛を解いて、病気になったらお医者に行くように、税金に困ったら税理士や役所に行くように、思い悩み、精神をすり減らすようになったら、誰かに相談したり、神様に祈ったりということもあっていいはずですよ。今日出て来る盲人バルティマイという人に見習うべきは、自らの願いを実現したい時に見せる、その諦めの悪さ、委ねる気持ちの強さですね。

この盲人バルティマイは、盲人なので目が見えない人でした。聖書において、「目が見えない」とは、単なる視力の欠落という意味だけでなく、真実が見えない、とか、神様を知らない、とか、そういう思想的な意味もありました。もちろん、この考えは、聖書の中にだけみられるもので、現実世界の視覚障害者に、その特徴を認めるものではありません。しかし、この盲人バルティマイは、そのように盲人であり、真実が見えず、神様を知らない者でありながら、「ダビデの子イエスよ、

わたしを憐れんでくださり」と叫んで、言い始めたと書かれています。そこには、大勢の群衆がいたわけですが、この盲人バルティマイほど、的確に明確にイエス様の正体を言い当てた人は、他にはいなかったようなのです。これは、時折、聖書が見せる、皮肉と言いますか、我々の信仰の盲点を突く、まさに真理であります。つまり、「あなたたちが、あの人は神様を知らないとか、この人はイエス様を分かっていないとか、そう思える人ほど、実は正しく神様とイエス様のことを見ているかも知れませんよ」というメッセージですね。私たちの教会が築き上げてきた伝統的な仕来りや所作には合致しないけれど、でも、がむしゃらに、不器用に、神様やイエス様のことを願い求めている人って、きつといるのだと思います。そういう人たちに対して、もしも「叱りつけて黙らせよう」と私たちがしているなら、それは悲しいことなので、よくよく吟味しながら宣教の業を続けて行きたいなと思っています。そして、ここぞって時に、イエス様の御心に触れて、呼び掛けてもらえるのは、そういうがむしゃらで不器用な人かも知れない、ということも謙虚さのうちに憶えておいても良いかも知れません。

「イエスは、立ち止まって『あの男を呼んできなさい』と言われた」と。「主の祈り」でもない、「使徒信条」でもない、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」という叫びが、イエス様の御心に届く、ということもあるわけですね。このイエス様が振り向いてくださった出来事に続く、人々の振る舞いは素晴らしいと思います。「人々は盲人を呼んで行った。『安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ』」と。多分、私たちの宣教活動の、一つの理想形ですね、これは。神様やイエス様を求める人に対して、まずは「安心しなさい」って伝えるという。「本当に神様のことを分かっていますか？」とか「信仰を持っていますか？」とか、そういう無粋なことを尋ねるんじゃなくて、「安心しなさい」と言えるか、どうか。試されているのは、求道者ではなく、私たち信仰者の方なのかも知れないって、ちょっと思います。

さて、50 節において、バルティマイは「上着を脱ぎ捨て、躍り上がった」と書かれています。これは最大限の喜びの表現であると同時に、物乞いの必需品であった「上着」を捨てることを通して、このバルティマイが、今までとは異なる新しい人生を踏み出した、と解釈されます。このバルティマイの物語で言えば、それは目が見えるようになって、新しい人生が始まるということですが、「目が見える」ことの意味の広さを踏まえると、様々な「新しい人生」が想像できます。例えば、それは、気づきを与えられて今までの考え方を改めるということかも知れないし、今まで許せなかったことを許すということかも知れない。あるいは、今まで真っすぐに祈れなかったことが、祈れるようになるということかも知れない。

いずれにしても、諦めない気持ちが、期待を忘れない信頼が、自分を越えたところで織り成される美しい業への委ねが、自らの人生を変革し得る奇跡のような出来事へと繋がっていくということです。それは、洗礼を受けてキリスト者となった方々にとっては、多かれ少なかれ体感した出来事であるかと思います。そして、最も重要な視点は、救われる前から、イエス様に会おう前から、何か宗教的な経験をする前から、私たちには、それぞれ「信仰」が与えられているということです。イエス様は、こう仰るわけです。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」と。何か良いことがあって初めて「信仰」に芽生えるのではなく、また、イエス様や神様を感じて「信仰」を得るのではなくて、一生懸命に、がむしゃらに、不器用に生きている時から、私たちには何らかの「信仰」がすでに与えられていて、時が来れば、それが大きな救いへと、癒しへと繋がって行くということです。

だから、自覚的な信仰者であれ、神様とかイエス様とかよう分からんという人であれ、傍から見ると、その生き方に明確な違いがあったとしても、でも、それぞれの心や魂には同じ「信仰」が宿っているのかも知れない。そして、その「信仰」を与えてくださるのは、自分自身ではなく神様で

あることも忘れないでいましょう。ましてや、周囲の人が、信仰を強制的に根付かせるわけでもありません。信仰にも、時がある、ということです。神様が、私たちに信仰を与え、信仰に気付かせ、信仰によって救われる時を備えてくださる。人の側が、その信仰の時を焦って求めても仕方ありません。

今日は、振起日ということで、ことさらに、この「信仰」の盛り上がりを意識する日であります。でも、何度も言うように、信仰にまつわる時を支配されているのは神様です。やれ振起日だと言って、今日、いつもより減茶苦茶たくさん祈るとか、いつもより俄然奉仕に専念するとか、どういう無理やりな信仰的活動を強いるわけじゃありません。むしろ、何度も言うように「信仰」を与え、気付かせ、救いの時を備えてくださる神様を信頼して、静かに祈ることを忘れないでいたいと思います。仮に祈る気分でさえないなら、「そのうち祈れるようになったら祈ろう」という、これもまた委ねの姿勢ですよ。

大丈夫です。私たちが躓いて、仮に祈ることを、信じることもできなくなっても、24時間体制で私たちを見守り、助けてくださる神様は、私たちの人生の喜怒哀楽に即応して、時に適った信仰と救いを与えてくださいます。振起日の今日、私たちは、ひとり努力して正しい信仰を目指すのではなく、神様の導きと配慮に委ねる気持ちで、「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ」の声が聞こえてくることを期待して参りたいと思います。

これから教会も幼稚園も、なかなか忙しい年末に突入していくわけですが、でも、焦らず、穏やかに、日々の恵みに感謝できるくらいの余裕をもって、主の道を歩んで参りましょう。お祈りを致します。

神様。今日も私たちをこの礼拝堂へと招いてくださり、感謝致します。あなたは、私たちに信仰を与え、気付かせ、時に救いの糸口として、私たちの信仰に応えてくださいます。私たちは、あな

たに招かれてここにいます。どんな時にも、あなたが必要な時を備え、救いを与えてくださると信じて、振起日の今日、感謝の気持ちを新たに致します。どうか、これからの日々、たとえ迷うことがあっても、躓くことがあっても、私たちを手放さず、あなたが良いと思われる時に、再び信仰の道へと立ち帰らせてください。あなたへ委ねる気持ちを忘れずに、私たちは今日また新しい毎日へと踏み出して参ります。どうかあなたの豊かな御守りと導きがありますように。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。

9月誕生者の祝福祈禱 聖書：詩編 139 編 15～18 節

秘められたところでわたしは造られ／深い地の底で織りなされた。あなたには、わたしの骨も隠されてはいない。胎児であったわたしをあなたの目は見ておられた。わたしの日々はあなたの書にすべて記されている／まだその一日も造られないうちから。あなたの御計らいは／わたしにとっていかに貴いことか。神よ、いかにそれは数多いことか。 数えようとしても、砂の粒より多く／その果てを極めたと思っても／わたしはなお、あなたの中にいる。

神様。

真夏の太陽がその役割を終えて、暑さと涼しさとが交わるこの9月に、あなたは私たちの敬愛する信仰の友人らに命をお与えくださいました。私たちが生まれる前から、あなたは御心のままに、この敦賀教会へと至る道を備えて下さり、この友人たちとの出会いを御計画の内に整えてくださいました。あなたの導かれる人生は、この世界に春夏秋冬があるように、変化に富み、様々な気付きと経験を私たちに与えてくださいます。この9月に生まれた方々の人生にも、一言では語り尽くせない喜びと悲しみ、苦労と満足があったことでしょう。あなたは、その全てを用いて、今、この時までこの方々を守り、導いてくださいました。どうか、この9月から始まる新しい一巡りの上にも、あなたの力強い御手と、豊かな祝福と、信仰の支えをお与えください。あなたから与えられた命を楽しみ、その生を謳歌できる日々を、どうか備えていてください。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。